会　議　録

＜会議名称＞　令和４年度　第２回岸和田市小中一貫教育推進会議

＜開催日＞令和４年６月 23 日（木）
＜時　間＞15 時 30 分～17 時
＜場　所＞岸和田市教育センター　１階　視聴覚研修室
＜出席者＞　○出席、■欠席

（学校関係者）

和泉校長	北川校長	南教頭	上ノ山教頭	何森教諭	川本教諭
○	○	○	○	○	■

（教育委員会事務局）

片山学校教育部長（委員長）	松本学校教育課長（副委員長）	八幡人権教育課長	角銅指導主事
○	○	○	○

（学識経験者）

山口教授
○

＜議題等＞
１．教育委員会挨拶
２．協議
３．今後の予定

＜当日配布資料＞
山口先生からの提示資料のみ（配布なし）。

１．教育委員会挨拶

【片山委員長】

こんにちは。学校教育部の片山です。本日は何かとご多用の中、第２回岸和田市小中一貫教育推進会議にご出席いただきまして、ありがとうございます。

前回は、昨年度の協議内容を振り返りつつ、今年度以降具体的に進めていくための方向性について、山口先生よりご助言をいただきながら、委員の皆さまと意見交換をいたしました。「何かを成し遂げなければならない」という壮大な義務感よりも、「子どもたちの豊かな育ちのために、実態から乖離しない取組みを進めていこう」ということを、前回のまとめにしたところです。

２回目となる今回は、小中一貫教育を進めるにあたって、まず各校区で考えていきたい「めざす子ども像」や、具体的な取組みについて話題にしたいと考えます。そこで本日も、学識経験者として関西福祉大学　教育学部　児童教育学科　教職センター教授　山口偉一先生にご参加いただいております。ご多忙の中、また遠方よりお越しいただき、誠にありがとうございます。本日の協議にあたって、姫路市の取組事例もご紹介いただけるとのことです。どうぞよろしくお願いします。

１時間半という大変限られた時間ですので、委員の皆さまには、ぜひ積極的にご発言いただき、実りのある会議にしたいと思います。それではこの後、どうぞよろしくお願いします。

２．協議

【片山委員長】

では、本日お示しいただいている資料について山口先生よりご説明をお願いしたい。

【山口教授】

前回、この会議の中で、子どもたちのために小中が協働して教育を行うということが小中一貫教育の根本であり、義務教育を考える枠組みであるということを確認していただいた。それをふまえて、岸和田の小中一貫教育をどのように進めていくとよいのか考えたとき、6 月 17 日の新聞記事が目に留まった。学校の稼業中は給食もあり、子どもたちの「食」についてはある程度保障できるが、夏休みに入ってしまうと心配な状況があるということが記事になっていた。私たちは、子どもの状況を、あるいは社会の実態をしっかりと見据えながら、それぞれの教育政策を考えていかなければいけないということをあらためて感じた。同じ地域にある小中学校は、同じ生活実態にある子どもたちの成長を見ているわけなので、子どもたちの生活実態を共通の視点で捉えていくことができる。小学校の先生と中学校の先生が、同じ保護者や地域の方々と共働しながら、少しでも子どもたちに力をつけて次のステップに送り出すという議論をしたいと思う。

まず、小中一貫教育のフレームを念頭に置いて話を聞いていただけたらわかりやすいと思い、姫路市のものを用意してきた。まず、姫路市は何のために小中一貫教育という枠組

みで教育を進めていこうとしているのかというと、子どもたちの学力の向上と人間関係力の育成を二本柱に掲げている。それらを育成するために前回の会議でお話しした３つ要素（共通の子ども像、一貫した教育内容や方法、小中教職員の協働）を設定し、取り組んでいる。さらに地域とのつながりを全体の土台とした構造図に、各々の取組みを位置づけることで見える化を図っている。いくつかの事例を紹介する。

一つ目は、小中一貫教育の目標として、「社会に貢献できる人づくり」を掲げている。この中学校区は、中学校の生徒数が 850 人、２小学校それぞれ児童数 850 人という大規模な校区になっている。この校区のめざす子ども像を設定するうえで、全国学力・学習状況調査なども活用して、まずはしっかり児童生徒並びに校区の実態把握に努めた。その結果、表現力についての課題や、テレビの視聴時間や携帯電話の利用時間、ゲームをする時間などが長いといったことが課題として出てきた。次に、その児童生徒の受け皿になっている家庭・地域はどうなのかというと、学校に協力的である一方、児童生徒の基本的な生活習慣の課題につながるようなものも浮かび上がってきた。岸和田市においても、このように、それぞれの学校が実態を把握して、教育目標やめざす子ども像を持ち、保護者や地域にもそれらを理解してもらって、共に取り組んでいく体制を作っておられるのではないか。そこで、それぞれの学校の状況をもう一度同じテーブルに上げ分析・検討することで、共通点（共通に取りくむ内容）を抽出できるのではないか。つまり、校区のそれぞれの学校が捉えている課題の最大公約数を、その中学校区の小中一貫教育の目標とし、それを具体的に表したものを子ども像として掲げていきましょうということ。その際に有効なツールになるのが、先ほどの小中一貫教育のフレーム。子どもの実態を整理する視点として、学力面はどうなのか、人間関係力の面ではどうなのか、ということを洗い出す。前回の会議で、岸和田市においてもそういったことはすでに行っており、一緒に夏休みに研修もしているというお話があったが、ぜひそういう場で、フレームに基づき話し合っていただきたい。

もう一つ大切なことは、欲張らないこと。あれもこれもやらない。焦点化すること。議論内容は視点を明確にして整理すること。そして実践は焦点化するというイメージがいいと思う。このように捉えると、岸和田市で現在行っている取組みをうまく意味づけて整理したらいいのではないか、ということが見えてくる。前回も話したように、このようにあらねばならないという固定概念から入っていくと、小中一貫教育の森に迷い込んでしまい、ねらいや方向性を見失ってしまいかねない。事例の中には、年間に数度、共通の生活月目標を設定し、校区全体に発信して取り組んでいるものがある。そうすることで、小学校と中学校が一緒に取り組んでいて、小学校の段階で教育が完結するとは考えていない、小中学校の教育を土台として将来の社会的自立につなげていくために、今この力を育てているということを、保護者や地域に発信し成果を上げている。このような発想が求められる。

もう一つ、特色のある取組みを紹介する。自尊感情が低いという実態を踏まえ、キャリア教育の視点を強調し、「未来を見つめる」、「自立」をキーワードとしてめざす子ども像を設定している。また、学力面では、伝える力が弱いという課題があることを踏まえて、言葉で表現する力を高めることもあげている。

繰り返しになるが、要は、小中一貫教育を進めていく上で、まず考えてほしいのは、今

までやっていることを、どのように意味付けをするかということ。お示しした事例で岸和田市でもすでにやっているということがたくさんあったと思う。その取組みを整理するだけでも、立派な実施計画になる。働き方改革を推進していかなければならない学校の現状を考えるとそれぞれの学校でやっていることを、つながりを持たせて共通実践していくことを中核にすることがポイントとなるのではないか。そのためにやっぱり必要なことは、抽象的なものを掲げるのではなく、まず、今の課題とそれへの取組みを整理しつつ、実際に小中学校でやっている共通項を、小中一貫教育としてやっていこうとすること。「はじめの一歩」を踏み出していただきたい。

【片山委員長】
今の山口先生のお話について、質問などを出していただきたい。

【何森委員】
示していただいたいずれの事例にも、取組みを進める組織図が書かれている。これはそれぞれの学校の校務分掌と関わっているのか。

【山口教授】
それぞれの学校で校務分掌をもとに決めている。

【片山委員長】
例えば３つの学校が集まって、校務分掌を確認しあって、新たな校務分掌を作るわけではないのか。

【山口教授】
そういうわけではない。各学校それぞれで枠組みにそって決めている。

【和泉委員】
（事例の一つの校区を取り上げて）校区の規模はどれくらいか。

【山口教授】
中学校は３クラスで小学校は１クラスか２クラス。どんどん小さくなってきている。

【片山委員長】
先ほど山口先生がお話しされた、小中が集まって具体的に子どもの様子を共有するという場は、岸和田でもよくあるのか。

【和泉委員】
近年はコロナの状況もあるので、そこまではないのではないか。

【松本副委員長】
　コロナの感染状況について、校区の小中学校どうしで共有すべきところを、連携が弱く共有が遅れてしまった例もある。

【山口教授】
　このコロナ禍によって、感染状況や兄弟姉妹・保護者などの健康状態等の情報共有を密にしていくことがますます大切になっている。

【八幡委員】
　外国籍の多い校区で、つながりができて良かった点はあるか。

【山口教授】
　家庭環境的なことや生徒指導的なことは、今までであれば小学校の卒業式後に小中の引継ぎをしてきたと思う。そういう短時間の引継ぎではなく、日頃から授業を見に行ったり、中学校の卒業式以降に、中学校３年生の教員が小学校の給食の様子を見に行ったりすることで、子どもの実態をより理解した上で、中学校入学後にかかわることができるようになっている。

【北川委員】
　学校で推進体制を作るとして、誰を担当にするか、選ぶのはとても難しい。９年目くらいの教員を担当にしてしまうと引継ぎが難しくなる。推進体制ができれば進んでいくのであろうが、どれくらいの教員がそこに関わって、どのくらいの時間がかかるのか。

【山口教授】
　それは大切なことだと思う。つまり、ミドルリーダー的な教員の存在。適材適所というものの、管理職が悩むことの一つ。小中の教員の多種多様なつながりを日頃から作っていくことがポイントになると思う。

【片山委員長】
　仲間意識、いっしょにやろうという意識を、どのようにして持っていくのかがポイントだと思う。いただいた計画書のしつらえを見ると、教育目標は抽象的、次に実態、そして次にめざす子ども像、これは具体的に書かれている。そして次の取組みにはさらに具体が書かれている。何を柱にもっていくかは市教委主導で考えていく必要があるが、大きな柱を姫路のように示す必要がある。具体の内容は、それぞれの校区で考えたらいいと思う。

【山口教授】
　今、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善ということを、これは姫路であろうと岸和田であろうと、どこであってもこれをめざしていかなければならない。中学校区全体で、自分自身の授業を見直す機会にしてもらいたい。子どもたちにとって、わかる

授業ができているか。見通し振り返りの場面設定ができているのか。そのようなことを相互に整理・点検してみるということを行っていくことも考えられるのではないか。

【何森委員】
授業改善については、その通りだと思う。
しかし、会議の数が増えるというのは怖い。今回の資料の実施計画に書かれているような会議が、純粋に増えるのか。あるいは、既存のものをあてこんで良いのか。

【山口教授】
ICT 機器を活用して遠隔の形なども取り入れながら上手にやっていけばよいのではないか。会議の数も極力精選する。負担が少ない形にしながら、とにかく一歩前に踏み出していく姿勢が大事。

【松本副委員長】
会議を新たに作る必要はないのではないか。

【山口教授】
大切なことは、意味付け、味付け、解釈。今やっていることを、小中一貫教育の枠組みで整理すること。
一番だめなのは、昔は熱心に取り組んだが、今は残骸になっているという状況。本質的なこと、できること、続けられることを、無理なく計画して進めることが大切。

【何森委員】
今後、どういうことが起こるのかが不安。我々の仕事は、積み上げばかりで、減らすことをしていないし、実際減らすこと自体難しい面もある。文部科学省の働き方の資料でも積み上げのデータがある。小中一貫教育を進めるのであれば、これに代わるふさわしいだけの何かを減らさないと。また、この方向で進むのであれば、他校のことを見に行くばかりに自校のことが見えないようになるのが危惧される。

【北川委員】
組織として位置付けていくことの大切さを痛感している。ある出来事が起きた時に、よくよく聞いてみると小学校時代のことが浮かび上がることがある。もっと早く分かっていればと思う。簡単な引継ぎの会だけでは限度がある。この状況を組織化することが大切であろう。

【山口教授】
中学校の教員であったら、小学校段階の子どものことをよく見ないと、表面上の理解にとどまってしまう。情報が少ないことでボタンの掛け違いが起こることもあった。

【松本副委員長】
　これを進めていくのであれば、何かを減らさないという意見があったが、今何を減らすのかというと難しい。これを進めていけばラクになることを考えていけばいいのではないか。これをすることで働き方改革につながるようにしたらよいのではないか。この会でぜひそういうことを考えていければと思う。

【上ノ山委員】
　小中一貫を進めようとしたら会議が増える。多忙感は増えるかもしれないが、有用感も増える。以外とそんな大変な話ではないのではないか。学校ごとで、スタイルは変わってもよいし、負担にならないようにハードルを下げてもらって安心した。

【片山委員長】
　今日のまとめとして、今後進めていくにあたっては、「実をとる」ということを大切にする。少しでも考えを整理しやすくするために、フレームを示す。活用しない年間指導計画では意味がない。今取り組めることは何か、小中がいっしょになってできることを考えていきたいと思う。

３．今後の予定
【角銅委員】
　次回は、９月８日（木）に行います。
　これで第２回の岸和田市小中一貫教育推進会議を終了いたします。本日はどうも、ありがとうございました。